二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

ホワイトプリズンVI

星孕む女神は終焉の風を渡る

小説 黄 支 亮
挿絵 松沢　慧

第一章　王都、夜　008
第二章　異界の門　048
第三章　交雑　089
第四章　恥辱花　131
第五章　小さな獣　180
エピローグ　248

これまでのあらすじ

聖王国に暮らす少年、フィオ。彼の義父クレイホーン男爵の豹変から物語は始まる。かつて武名を讃えられた男爵は突然、悪鬼のように変貌し、拐かした令嬢、マレーネを我が物にしようとするのだった。義父の豹変に戦くフィオだが、すでに遅く、ポーラ、リディアまでが囚われ、「薬を使われて、最初に受け入れた男の精がなければ生きていけない」身体となる、服従の秘薬を処されてしまう。悪鬼の奴隷になることを拒む三人に対し、少年はやむを得ず、女たちに自分の精液を刻印するのだった。そして怒り狂う男爵に虐げられる四人。フィオは過酷な調教の中で女たちとの絆を深めていく。やがて、男爵の所行は神殿の知るところとなり、僧兵が館に突入することで事件は一応の決着をみた。

神殿に保護される四人。しかし、肉欲にまみれたフィオたちは、神官たちに虐げられ、王国から失踪した女王を捜索する過酷な旅に駆り出される。神殿の命により、四人は南海に送られることに。だが、何者かの導きによって捕縛を逃れたフィオたちは、密林の島ガルバにたどり着く。そこは、女性たちが奔放に性を貪りあう秘境であった。

そして、ついにフィオの前に姿を表す、かつての聖王国女王エマ。フィオたちをこの島に導いた女王の口から、ようやく長い旅の結末が語られようとしていた……。

登場人物紹介

Characters

マレーネ

クレイホーン男爵にさらわれ、フィオと契りを結ぶことになった西方辺境伯の息女。黒髪の美女。

ポーラ

フィオとは血の繋がらない叔母。性に対しては奔放な意識を持つ女性。栗色の長い髪の女性。

リディア

フィオの幼なじみ。騎士見習いだったが、伯爵の淫戯に巻き込まれ、フィオの妻となる。茶色い髪を肩まで伸ばしている。

フィオ

義父、クレイホーン伯爵の死とそれにともなう災いにより、マレーネたち三人を妻に娶り神殿に追われる身となった少年。

エマ

かつて聖王国の女王だったが、現在は国を捨て、重臣たちと南国の島に暮らす。黒い髪を顎のラインで切りそろえている。

シルビア

かつての王立魔法学校の校長。腰まで伸ばした黒髪を、頭の後ろのところで無造作にまとめている。

サラ

かつては聖王国聖教団の神官長だった。柔和な面立ちをした金髪の美女。

ニーナ

かつての聖王国聖母騎士団の団長。硬くて癖のある赤髪を少年のように短く刈り込んでいる女丈夫。

カレス

女王エマの義弟にして元は王国の摂政公。聖王国屈指の魔法使い。
女王たちとともに暮らし、夫の役割を務めている。

エリス

シルビア失踪のあと、王立魔法学校の校長となった金髪の女性。かつてのフィオの師匠。

ジゼル

古代魔法の研究に没頭する男。女王の手足となって働く。王立魔法学校の出身者で、エリスとは顔なじみ。

第三章『交雑』より

こちょこちょ……。

まるでくすぐるようにして舌がリディアの蜜壺を穿る。内側に溜まった若い肉蜜が舌に掻き出され薄い襞の外へと漏れ出してくる。

「リ、リディア……」

少年は悔しそうに呟いた。シャボンに囚われたフィオにはどうすることもできない。ただ少女の拷問を眺めているしかないのだ。そして、悔しさはカレスも同じであっただろう。愛人であり、妻であり、同志でもある騎士団長が無残に唇と陰部を汚されていく。自らの意思で扉を開けることを決めたとはいえあまりにも辛い現実である。と。仲間の目の前でニーナに襲いかかる怪物たちが動き始めた。美女の紅色をした唇から怪異の舌がするりと抜け出す。リディアと違い、ニーナを拷問するトカゲの舌はいまだに膣の奥底に入り込んでいないようであるが……。

「い、いったい何を……」

シャボンの中で窮屈に足を折り、海老反ったままシルビアが呟いた。魔法使いもここまでロレーンの試練が過酷であるとは想像していなかったのだろう。果たしてニーナの唇から抜き取られた長いトカゲの舌はするすると女の肌の上を滑り、蜜を噴き出す女の陰部に取りついた。ニーナの牝貝の上ではすでにトカゲの舌がくちゅくちゅと踊り、襞を擦っている——。

「はあん……、はあっ、はあッ……はあああっ！」

肉襞のごく浅いところを弄ばれ、甘い吐息を漏らしていたニーナの声が不意に苦しげなものに変わった。最初にニーナの割れ目を舐めていたトカゲの舌が、女の滑らかな粘膜の内側に入り込んだのだ。そして、すぐにもう一本の舌、先ほどまでニーナの唇を責めていた怪異の舌が競うようにして女の敏感な局部にもぐり込む。

ずにゅゅ……ずにゅっ！

まるで花の匂いを嗅ぐかのようにして二匹の怪異はニーナの股間に顔を寄せ、アリクイのごとき長い舌をニーナの陰部に差し入れてこれを震わせている。熟れた騎士団長にとってはたまらない刺激であった。

「ん、んおおうッ！　んッ、んッ……んんっ、んおおおーっ！」

ニーナの膣の中、柔らかい鍵穴の中で二本の針金が激しく踊る。襞の多い柔らかい膣の内側。怪物のごつごつとした舌先が膣内を掻き毟り、美女はそのあまりに鮮烈な刺激に左右の唇の端から涎を溢れさせた。

――き、気持ちいいっ！

仲間たちと鍛えあったニーナの性器は強靭になるどころかより敏感になっている。脆弱な女の膣が怪異の舌に耐えられるわけなどなかった。

ぐちゅぐちゅぐちゅ……。

柔らかいニーナの肉孔、イソギンチャクのように口を小さく突き出した肉の入り口が二本の細い舌による掻き回しを貫って不規則に変形し、その奥から肉蜜がじゅぶじゅぶと泡を噴くようにして染み出してくる。

「はああ、はあッ！　はッ！　はああっ……あはああっ！」

ニーナは床の上で背中を反らして股間への痛撃を逃れようとする。だが、怪異は女の下腹部を上から手で押さえつけて自由を奪い、騎士の敏感なポイントの一つとなる尿道裏を舌先でごりごりと削る。ニーナは熟れた牝獣の咆哮を唇から漏らした。

「だ、だめ、だめだ、そこは、そこは、そこはああっ！」

スイートスポットへの巧みな穿り。騎士団長は気持ちよさに息も絶え絶えとなり――怪異たちは獣姦に酔いしれる破廉恥な女にさらなる罰を加える。最後の一匹、ニーナを束縛する三匹のトカゲの最後の一匹がニーナの股間に顔を近づける。仲間が啜る甘い汁の匂いにおそらくは惹かれたのであろう。怪物のイボのついた舌が熱く燃え上がり、白蜜をだらだらと垂れ流すニーナのアワビにするすると入り込む。

ぐちょぐちょぐちょ……。

絡みあうようにしてニーナの蕩ける膣の中で怪異の舌が三本踊った。時に荒々しく、時に優しく巧みに女の粘膜が掻き回される。

「はおッ！　おっ、おおっ、おおうッ……お、おおーっ！」

三本の舌に敏感な孔の内側を攪拌されたニーナは不規則な陰部奥への刺激に号泣する。
「あぐううっ、あぁッ……あぁッ……あおおーっ！」
屈辱的で一方的な責め苦。ニーナは不細工に歪めた顔を狂ったようにして左右に振る。
「だッ……だめだっ……だめだ……だ、だめだっ……だめ、だめ、だめだあぁッ！」
赤毛の騎士は『だめ』と言い続けて腰をかくかくと上下左右に振った。
「は、はあぁッ！　はあぁーッ！　フィ、フィオ、助けて、助けてッ！　ほ、本当に……あはあぁっ、本当にこのままじゃ……あはあぁッ！」
ニーナのすぐ近くでリディアも眉を寄せ苦悩している。その可憐な女陰に突き刺さっているトカゲの舌は僅かに一本だけ。それでも、そのたった一本の舌が起こす漣（さざなみ）が少女の膣に致命的な快楽を与えている。
ぐちょぐちょ……。
本当であればフィオのペニスがぴったりと収まるはずの肉孔を、怪物の細い舌が我が物顔で占拠している。おちょぼ口に突き出した少女の入り口からはどろどろと愛液が垂れ流れていた。そして。怪異たちが新たな動きを見せる。本能に忠実な怪異たちは、生贄の膣が燃え上がり、卵を打ち込むことができると判断したのだ。少年にとっても、女たちにとっても辛いことであったが、リディアとニーナの二人がたっぷりと感じ、快感を覚えていることはもはや疑いようもなかった。

第四章『恥辱花』より

くちゅくちゅくちゅ……。

汁をたっぷり含んだ肉の小径。甥っ子だけに遊ぶことを許した神聖な部位にこともあろうにヤドリギの根が突き刺さっている。しかもこのヤドリギの根は自らの意思をもってポーラの敏感な秘部に爪を立ててこれを掻き毟るのだ。

「いやああっ、だめ、だめ、だめええッ！　あはああッ……あーッ！」

サラが髪を振り乱して下からの突き上げに苦悩し、ポーラもまた顔を激しく左右に振りたくり、汗を飛ばして絶叫する。

「フィ、フィオッ！　ああ、何なのよッ！　ああーっ、何なのよ、これ……あはああッ！」

木の根に絡め取られ、立ったまま膣を穿り返される。股間の毛をぞわぞわと逆立て、甥っ子との激しいセックスによって鍛えられた局部からは汁を吐き出す。白い肌を強張らせて悶絶するポーラの姿にフィオは悔しさと同時に美しさを感じている。

こりこり、こりこり……こり、こりこり……。

眉を八の字に不細工に寄せたポーラの股間の中心を三叉の根が擦る。まるでポーラの感じるポイントを調査するようにしてヤドリギは小刻みに根を動かす。ポーラの側も陰部の内側の急所を相手が探っていることを感じていた。そこで、女は鼻の穴を拡げて、涎に濡れた唇を真一文字に結んで相手に弱点を知らせまいと努力をする。同じように立ったままの姿勢で局部を痛めつけられるサラはヤドリギによってスイートスポットをすでに探り当

てられてしまっていた。急所を知られてしまったサラは当然そこを徹底的に責め抜かれ激しく悶絶している。

「はひいいッ、いや、いや、いやあああッ！　そこを、そこをこすらないで、こすら……なはああっ！」

ポーラの耳にもサラの悲痛な叫びは届いていた。

――フィ、フィオのためにも、サラのようには……サラのようにはなれない。なってはいけない。

フィオの妻として誇りを決して忘れてはならない。契りを結んだ若者にみっともない姿は見せられない。そう決意を固くしたポーラの陰部を意地悪なヤドリギがこりこりと触診をするようにして蠢く。そして。探りを入れる鋤の先端がポーラの感じるポイントの上をごりりと削った。

「……んふッ！」

ポーラは目を開けて、殊更に感じないふりを試みる。いやらしい熊手は果たしてポーラの演技に引っかかり、そのままポーラの膣内の急所から逸れていく――。栗色の髪が美しい若い叔母は頬の筋肉を僅かに緩める。と、その時のことであった。行き過ぎるかに見えた熊手の先端がポーラの膣奥、尿道裏の感じるポイントに戻ってきたのだ。

こりこりこりこり……。

僅かに安心したところへの苛烈なマッサージであった。ポーラの強い意志はこの一撃で一瞬にして粉砕されてしまう。

「あ、あああッ！　あが……あがああっ！」

立ったまま拘束された美女は爪先立ちになり、木の根に爪を立てて絶叫する。頭の芯に電撃を流されたような素晴らしい快感。ポーラは我を忘れて唇から涎を飛ばす。

「あひッ……あひいっ、ひいいッ！」

まさに痛恨の一撃。若い夫の前でポーラは自らを見失い、そのために、彼女は罪に罪を重ねてしまうこととなった。

股間を震撼させた一撃にポーラの意識は飛び、そこで己の肉体に課せられていた禁が一瞬だけ途切れてしまうこととなったのだ。

――あッ！　だめだ！

ポーラが気がついた時には何もかもが手遅れだった。否、仮にそのとき間に合ったとしても執拗な木の根は第二、第三の波状攻撃によってポーラが立ち直ることを許さなかっただろう。

ぴっ……。

ポーラの股間、襞奥の小さな穴がぴりっと震える。禁が解かれた小さな肉の穴から最初の雫が飛んだ。

「あ、ああ、だめ、漏れる漏れる、漏れるうううッ！」
ポーラの唇が紅色の蝶のように華麗に、哀しく舞った。
ちょおおっ！
金色をした小水が女の尿道口から飛び散り、それに追い討ちをかけるようにして三叉の熊手が美女の膣壁、小水の通る穴のすぐ後ろを無慈悲にマッサージする。
しゃああッ！　しゃああッ！　しゃあああッ！
小便の通る穴のすぐ裏を激しく刺激され、ポーラの股間からは断続的に激しく金色の飛沫が飛ぶ。
「あ、あわわっ！」
栗色の髪が美しい美女は哀しげに眉を寄せて左右の尻肉をびくびくと痙攣させている。あまりにも効果的な責め苦であった。
ぐちゅッ、ぐちゅッ、ぐちゅッ……。
ピンク色が艶かしいポーラの陰部奥。ヤドリギの根は美女の弱いところを狙い、苛烈な集中攻撃を続ける。
「あはああッ！　あはッ、ああーっ……あはああッ！」
サラに倣いポーラもまた顔を激しく歪め、号泣した。
青い稲妻が膣内を駆け巡るような清冽な快感。生贄にされた女たちは自らを律すること

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/